

こころ日記「ぼちぼち」④

不登校の学力保障

学校に来ない、来られない子どもたちが増え続けている。子どもが少なくなっていくのにおかしいではないかと思うが、これが現実だ。

今色々な学校に出向くことが多い。どの学校もクラスに入ると、3つ~5つくらいの空席がある。ごく当たり前の風景になっているのが、何とも言えない気持ちになる。

現役のころ、自分のクラスだけは不登校を出さないぞと心に決めていた。しかし人の行動は、望み通りにはゆかない。朝教室に入り、今日も来てないのを確認すると、気が重くなることがあった。

小学校1年生から不登校だった生徒を、中学1年から担任をしたことがある。もちろん、入学式も出席できなかった。毎週金曜日には、家庭訪問をし、家での様子や趣味のことなどとりとめのない話をして帰る。結局私はこの生徒を3年間担任した。ほぼ欠かさず毎週一回の家庭訪問を続けたことは、自分でもよくやったなと思う。家庭訪問がその子にとってどうだったかわからないが、中学卒業後の進路を自分で決め、高校に進学できたときは、本当に嬉しかった。

不登校の学力保障が問題になっている。正直今の日本の学校システムでは、保障されているとは言い難い状況だ。学校では毎年度末に、欠席日数30日以上の不登校の「進級査定会議」なるものを開く。まずは担任が、保護者と面談し進級するかどうかを尋ねる。中学生であれば本人も交えての懇談をする。ほとんど、いやほぼ100%の不登校生徒は、進級を望む。そこには学力があるなしは考慮されない。

会議では、担任が「本人が進級を望んでい

と報告すると、誰も反対はせず進級、卒業となる。

長い教員生活で、不登校の成績をつけるのにずっと疑問を抱いてきた。中学校であれば定期テストがある。テストの点数だけでなく、提出物や学習態度などを加味して総合的に成績をつける。今は絶対評価なので、相対評価とは違い一人ひとりの頑張りをつけられるのがいいと思うが。

学校に来ない不登校生のテスト記録は皆無だ。しかも提出物ゼロ、学習態度も見ることができない。どうやって成績をつけろというのか。



中学校では、たいていは5段階評価だ。例えば、毎日元気に学校に登校している子がいるとしよう。しかしテストの点が取れない、提出物が出せない、でも学習態度は良い子がいたとしたら、それは「1」の成績の範疇に入る。では不登校はどうかというと、昔は学籍簿には「不可」とつけていた。いわゆる「評定不可」、成績がつけられないということだった。しかし、あるとき不登校にも成績をつけるようにという通達があり、「1」をつけるようになった。では、毎日登校し真面目に学習参加している子の「1」と、不登校生の「1」との違いは何なんだろう。その疑問を尋ねても、ちゃんとした答えは返ってこなかった。

教員を辞して行政の不登校支援の教室に勤務していたとき、不登校にも定期テストを受けさせていた。それは担任からの要望で、定

期テストのたびに教室まで問題が届けられ、私たち支援員が試験監督をするのだ。採点結果によっては、成績が「2」や「3」が付くことがあり、毎日学校に行っている子の「2」との違いはなんだろうと、またまた疑問に思うことがあった。

不登校の中学生が一番気にするのは、進路に影響する出席日数だ。適応教室に通うとカウントされるので、頑張って通室する子がいる。内申点が低いと進路も限られてくるので、成績もとても気にする子が多い。

子どもの気持ちは理解できるが、ちゃんとした学力もつけずに、成績をつけることに、私は今でも納得できない思いを持っている。

現在文科省は、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」(COCOLOプラン)を提案している。不登校児童生徒が学びたいと思った時に学べる環境の整備として、校内教育支援センター(スペシャルサポートルーム等)の設置をすることを行政に勧めている。支援スタッフ等の活用や学校ボランティア等の協力も得ながら、空き教室や空いているスペースを利用し、まずはそこに不登校の児童生徒が通えるようにというねらいだ。

しかしそこには、一人ひとりの学習計画があるのだろうか。将来を見据えた学力保障があるのだろうか。

私は生徒たちに、もう一度学び直しをしたいのなら留年もありだよと、よく言っていた。子どもたちは皆、留年ができないと思い込んでいて、保護者もそう思っていることが多い。もし留年すれば、異年齢の子どもと一緒に学ぶことになる。しかしそれには抵抗感があり、比較されることを恐れるのも現実だ。病気で留年はあったが、不登校生の留年は、私の記憶ではなかった。在籍期間の経過とともに、ところてん式に卒業させてしまうことに、後ろめたい気持ちを持っていた教師はいなかったのだろうか。

義務教育が終わると、学力がついていない子どもたちは進路選択が狭められる。学校という枠組みから離れると、誰に頼るのか。

ほとんどの親は、子どもの進路に奔走する

ことになる。フリースクールも教育課程として認める動きがあるが、どの子もそこには行けるわけではない。支援が途切れたときに、子どもたちは社会から断絶されてしまうことになるのだ。

先日、フランスの不登校について知る機会があった。

学校に行かなくなった早い段階で介入し、学校や家庭任せではなく、行政、医療とも繋がり、包括的アプローチをする。そして誰が何をするのかを明確化する。義務教育の中では留年や飛び級制度があり、卒業式もないのでスティグマが生じにくい環境だそう。学校も転校でき、子どもがプレッシャーのない環境で学ぶことができる。一人一人の学習進度に応じた支援を行い、子どもは中学校卒業資格に向けて頑張る。こういった支援はすべて無料。学び直しのできるシステムがあり、学習に遅れがない支援を誰かが途切れずに行う。子どもが学び続けられる、あるいは学力保障するのは国の責任であり、親に責任を押し付けない。

日本との違いに、考えさせられた。

不登校の人数を数えるより以前に、子どもの学ぶ権利について、もっと真面目に国の責任として考え直す必要があると強く思う。

つづく